

# 「集古会」と「百鬼夜行絵巻」との関連についての覚書

牧 野 和 夫

はじめに

二〇〇七年末の台湾大学における発表「古典キャラクターの『継承』と近代趣味家」と二〇〇八年の五月二十四日中國文化大學における（日本語文學系主催日本研究國際學術研討会）発表「大正期における妖怪キャラクターの展開―近代趣味家の周辺―」につながる意味で、近代の趣味家の集まりである「集古会」と「百鬼夜行図」との連関を軸に、明治末大正初期頃の「学問」の生成と日本中世の作品との「かわり」の実態を覚書風にうかがうことにする。

先ず『集古会』規則を掲示しておく。

「第一條 本会は談笑娯樂の間に考古に関する器物及書

画等を蒐集展覽し互に其智識を交換するを以て目的とす

第二條 本会は右の目的を達せんが為めに年五回（一月三月五月九月十一月内三月を大会とす）を限り毎会第二土曜日午後一時より神田区仲町青柳亭（大時計前）に於て開会す

第三條 本会の出品物は充分なる監理に勤むと雖万一紛失の場合其責に任せず

第四條 本会は年五回集古会誌を發行して之を會員に頒つ

（以下省略）」

一、明治四十二・三年の集古会と百鬼夜行図

明治四十三年六月刊行の『集古』（集古会の機関雑誌）に抛れば、明治四十二年に、定例の展観を「青柳亭」で開催している。

課題は「変化物」で、出品目録が前引『集古』に掲載されている。

集古会の機関雑誌『集古』に掲載された出品目録は以下の通りである。真珠庵系の『百鬼夜行絵巻』の他に、別本系のものも出品・展観されている。

「課題 変化物

- 越後七不思議図説 一卷 清水 晴風  
手習用折手本 化け物図を印刷しあり 一帖 同  
百鬼夜行蒔絵菓子器 一個 同  
落語演劇化競丑満鐘番附 一枚 同  
晴風自製玩具重いつづら 一個 同  
同筆倭日史記白旗野行 一冊 同  
百鬼夜行図巻 写 一卷 黒川 真道  
俗に鳥羽僧正筆と伝ふるもの実は土佐光重筆なり

／光重は行光の子延文年中の人

百鬼夜行新本 写 一卷 同

百物語となる云々の序ありて末尾に慶長六曆仲冬／十有六日 洛陽之陰士泉谷 花下翁述とあり残欠／と見えて百鬼具足せず各図に名称のみありて解説／を附せず

化物尽画卷 残欠 写 一卷 林 若樹

末尾に寛政十一年蘭香堂誠之とありこれは模写／の筆者なるへし名称の下に一々解説を附す黒川氏／出品の慶長六曆云々前記の百鬼やこうとは図や、同じくして異れり

化物画卷 写 一卷 同

……

晴風出陳の品々は「自製玩具重いつづら一個」に端的に示されるように、玩具博士の面目躍如ともいうべきものばかりである（晴風と玩具或は集古会と玩具の関わりについては別に稿を用意している）。また、「同（晴風）筆倭日史記白旗野行」は、明らかに百鬼夜行のパロディで、日清戦争の滑稽諷刺のシリーズもの、「明治廿八年七月 秋山武右衛門」と版元を匡郭外下方に刷印した芳幾の『滑稽倭日史記』（九枚）が先行する。「同（晴風）筆倭日史記」一冊とあるのは留意すべきであろう。百鬼夜行系の妖怪が政治

諷刺に活用される錦絵（明治十六年月耕『廿三年の未来記』）や漫画（伊東忠太など）は、その後の、とくに政治記事の「きまり文句」「昭和の妖怪」「平成の妖怪」など元号を冠した「妖怪」系の時事用語などに引き継がれるものとなったのではないか。

〔百鬼夜行図巻 一卷〕「百鬼夜行新本 写一卷」の出陳者黒川真道に即して云えば、実は、翌年の明治四十三年四月に国書刊行会より刊行された『真頼全集』第二（絵画篇）こそ、黒川真道が編纂したものである。その序文に記す通り、考古家古川躬行の補訂纂輯を経ているものであるが、「百鬼夜行」の項目に列記される伝本は、以下の通りである。

〔百鬼夜行図 一卷〕

土佐権守経隆筆、近衛家所蔵、

〔補〕本朝画図品目云、一種の百鬼夜行、近衛家にある、至て筆はその者なり、経隆の画なり、

画後云、正和五年六月一日、以<sub>二</sub>内蔵寮本<sub>一</sub>、三日の間写<sub>レ</sub>之了、従五位下藤原経隆、

躬行曰、経隆は、中将少輔隆親男にして、顕文抄に承安の人とせり、此奥審の正和より、承安に遡るに、まさに百四十年、甚疑ふべし、然るに於<sub>二</sub>陽明家<sub>一</sub>柏木政矩原本を展看し、此奥書直に謄写し来る処、于<sub>レ</sub>時明治五年

壬申五月なり、

〔補〕真頼曰、百鬼夜行一卷、模本博物館にあり、

〔補〕四郎曰、今帝室の御物となれりと聞けり、

同 一卷

好古小録云、一卷画、光重、

〔補〕本朝書画品目云、百鬼夜行一卷、画、光重、

〔補〕画一覽下巻云、書画品類云、按ずるに、明德頃の古画なり、画工不<sub>レ</sub>詳、

貫雄曰、幕府御物、光重筆なり、安政五年冬十月住

吉弘貫、台命によりて模写せり、可惜残欠なり、

〔補〕元幹曰、此余、百鬼夜行図あり、後人の作にて取に足らず、

同 残欠

倭錦云、土佐吉光、百鬼図巻残欠、

同 一卷

土佐系図云、大蔵少輔行秀、画<sub>二</sub>百鬼夜行<sub>一</sub>、

〔補〕倭錦云、土佐行秀、百鬼夜行、

〔補〕同、

〔補〕画一覽下巻云、国朝書目云、百鬼夜行図一卷、

光吉、

〔補〕同

〔補〕古画目録云、百鬼夜行図、光信筆、京都十念寺蔵、

〔浄土宗〕、

〔補〕 同 一巻

〔補〕 四郎曰、京都紫野大徳寺塔頭真珠庵の什物なり、今国宝となれり、

〔補〕 同異本

〔補〕 所藏者不詳

〔補〕 真頼曰、模本博物館にあり、巻尾云、右之妖化物之絵古画図写者也、元和三年五月廿一日、住吉内記とあり、画様は鳥獣虫類等の妖怪の図にて欠本也、

同新図 一巻

倭錦云、土佐光起新図、百鬼巻物、(『黒川真頼全集』

(明治四十三年四月発行 国書刊行会) 第二「日本絵画篇」所収「訂正増補 考古画譜」巻七：黒川春村原稿／古川躬行纂輯／黒川真頼増補 国会図書館データベースに拠る)

黒川春村・真頼・真道に亘る蒐集品のうちの一品が、同「百鬼夜行図巻」一巻である。『集古』の「俗に鳥羽僧正筆と伝ふるもの実は土佐光重筆なり／…」との解説を附すが、『増補改訂 考古画譜』の「同 一巻 好古小録云

一巻画、光重〔補〕に該当する一点であろうか。とすれば、「幕府御物」と記されており、真道の手許に収まる経緯には興味深いものがあるう。

『集古』の「百鬼夜行新本写 一巻」は、解説に云う、「序ありて末尾に慶長六曆仲冬…」の如くであれば、現在続々と紹介されている「百鬼夜行本」のいづれにも該当しないものである。この黒川氏蔵本と「図や、同じくして異」なっている、林若樹蔵の「化物尽画巻」残欠一巻も「末尾に寛政十一年蘭香堂誠之」とあることを考慮すると、現在紹介済みの諸伝本にはない(最新の情報に拠ると、更に伝本は複数増加)。

比較検討を備忘風に記した箇所「百物語となる云々の序ありて…」や「黒川氏出品の慶長六曆云々前記の百鬼夜行とは図や、同じくして異れり」などは、萌芽的な研究とも受け取れる記述である。大正の震災に焼失した真頼蔵の品が多く、明治四十二年の集古会展観品が現存するものかどうか、今後の課題である。

春村・真頼・真道の三代に亘る研究・蒐集は、正に、『百鬼夜行絵巻』研究の先鞭をつけたものと考えられる。『百鬼夜行絵巻』の伝本は、敢えて云えば、真道を介して『集古』に流れ込み、清水や林たち集古会面々の蒐集した伝本や「もの」をも併呑して、考証・研究と資料展観という両面を備えた「小さな、奥深い」世界を、明治四十二年の神田区仲町青柳亭(大時計前)の一角に於いて「談笑・娯楽」裡に現出してみせたのである。

## 二、納札会と百鬼夜行絵巻―大正九年の一例―

更に集古会会員が深く関与した百鬼夜行図として考慮すべき領域が納札の方面である。大正・昭和の納札家から江戸・幕末期の納札界の先達（文案：仮名垣魯文、画案：河鍋曉齋の絵札が現存。近く紹介予定）として崇敬された河鍋曉齋や柴田是真（近く『アジア遊学』誌に所収予定稿参照）がいる。曉齋の「為事」として、「百鬼夜行」に関わる画業はよく知られているが、「百鬼夜行」の図柄はその後の幾多の錦絵師へと継承されている。納札の世界における絵札の図案には、近世刊行の『狂画苑』経由で百鬼夜行の個々の化物キャラクターが題材を供給していたことは、浪花趣味道楽宗の創立者高橋好劇旧蔵『交換札貼り込み帖』一帖に貼り付けられた交換絵札で証拠立てられる。貼り交ぜられた前後の絵札から大正三年頃の大阪（？）での絵札交換会での絵札か、とおもわれるものである。

『狂画苑』に関しては、佐々木竹筍楼（？）の求版「幕末明治」後印本が『滑稽漫画』の絵手本類として流布しており（川崎市立市民ミュージアム蔵本など）、あえて江戸の古版に拠ろうという意識が働いたとも考えられない。新刷の求版後印本が京阪地方に流布していた、と考えなければ

ばならない。また、翌年大正十年に発刊された『滑稽全集』に収載されてもいる。

若干を対照して示すならば、一目瞭然となるものであるが、詳細な検討は、大阪の交換絵札会の「百鬼夜行絵札」と併せて別に稿（『アジア遊学』誌所収予定稿）を設けたいが、「狂画苑」の「百鬼夜行図」に収まりきらない図を少なからずもつ点は興味深い。

この他に大正九年、納札界の大物であった、近松・吉田安の「追善供養」と銘打った絵札交換会が開催された。巴連の中心人物で集古会会員の高橋藤がからむもので、ここにも「百鬼夜行」に材を借り、「絵巻」形式を首尾に構えた、絵師豊齊の手に係る絵札図案が、配られたようである。絵師豊齊、四代歌川国政で、本名は竹内栄久である。勿論、集古会にゆかりの深い錦絵師であった。

開催会主の「口上」に、近松・吉田安両人の「新盆」を迎えた七月、知友あいまって追悼の意を込めた絵札交換の会を催す、との趣旨が述べられている。

現在、管見に入ったものとしては、次の三点である。

・千葉県市川市某氏旧蔵「〔納札貼り込み帖〕」（同体裁の二冊の内、おそらく他にもあろう）内

・国際日本文化研究センター蔵「〔納め札〕貼り込み帖」一帖内

・家蔵台紙（貼り込み帖をバラした）九枚

なお、「交換絵札」についても「貼り込み帖」の調査比較が欠かせない。会主の口上（開催挨拶）の札がネット上に公開された国際日本文化研究センター蔵貼り込み帖にはない。近年の古書業界では、貼り込み帖をバラバラにしてバラ売りにする傾向があり、口上札は格安の値段で別売り或いは破棄されることが多い。

絵師豊齊の手に係る絵札図案が、主として納札界の先人である河鍋暁斎の図案に係る『暁斎百鬼画談』を手本にしたものであることは、両者を比較すれば明瞭である（国際日本文化研究センターの画像データベースに『「納め札」貼り込み帖』と『暁斎百鬼画談』、ともに画像が公開されているので参照願いたい）。

納札画案における百鬼夜行図の拠り所と成ったものが当時の刊行された絵手本、主として先達・暁斎の図案や当時新刷流布した後印本『狂画苑』所収「百鬼夜行図」などであったことは、納札の世界と絵師豊斎など江戸以来の「浮世絵師」（関西における長谷川貞信・小信や川崎巨泉など）の介在を想定したメディア・出版界との関連で肯かれるところである。

会主の職業など、わずかに知るところを以下に記す。関岡扇令氏作成「明治四十四年の納札者一覧表」より抜書き

するが、明治44年刊『納札大鑑』に基づく、と注記のあるものである。

### 三、集古会と納札

納札の「連」と「集古会」は、どのような関係にあったのか。山中笑や清水晴風については、周知の如く内田魯庵が「納札の過去現在未来」に記して、既に明らかであるが、別に「集古会」と納札のかかわりを示す大正初期頃の資料を二点あげたい。一点は既に「西国三十三所巡礼記」研究史の「空白領域」——「集古会」「生人形」とその周辺——（『巡礼記研究』第四集、二〇〇七年九月。続稿を予定）に紹介を了えた「いせ万俸徳太郎」催主と銘打った、「納札子供会御札」の絵札である。

「大正二年十月十八日於高砂俱樂部に贈札及寄贈品

納札子供会御札」催主 神田市場いせ万俸徳太郎」  
「玩具出品諸氏芳名」から抜書きすると

「莚女 菊ぜん 扇松堂」など多くの納札家が参加しているが、「補助」として

「澤塵外 山中笑 永井素岳 田夕梅 石井新 松兼  
扇太

林若樹 三村竹清 高橋藤 素山 彫金 彫源

| 題名       | 本名     | 年齢 | 職業         | 住所             | 趣味     |
|----------|--------|----|------------|----------------|--------|
| 佐きん(彫きん) | 佐々木金次郎 | 44 | 彫氏         | 本所林町1丁目        | 多趣味    |
| しま米      | 島田米多楼  | 47 | 提灯師        | 神田区豊島町28番地     |        |
| いづ赤      | 泉赤次郎   | 42 | 漆刷毛屋       | 神田区久右衛門町5番地    |        |
| 近松       | 谷中松次郎  | 50 | 甘藷問屋       | 日本橋区蠣殻町3丁目8番地  |        |
| 吉田安      | 吉田安太郎  | 40 | 左官棟梁       | 神田区元岩井町20番地    | 清元     |
| つじ巳之     | 佐藤巳之助  | 31 | 傘提灯業       | 桜川町1番地         |        |
| てう安      | 佐藤安之助  | 29 | 提灯職        | 新橋芝口3丁目14番地    | 藤間流の踊り |
| 梅栄       | 梅沢栄吉   | 44 | 提灯師        | 京橋区八官町6番地      | 清元     |
| 石井新      | 石井新兵衛  | 45 | 代々尾州御魚御用   | 日本橋区松島町21番地    |        |
| 家康       | 佐藤康二郎  | 59 | ?          | 浅草吉野町55番地      |        |
| 家寿治      | ?      | 52 | 一時左官職      | 浅草三好町1番地       | 雑俳     |
| 本常       | 中島常吉   | 40 | 製本業        | 芝区南佐久間町2丁目3番地  |        |
| 大銀       | 長沢銀次郎  | 31 | 在郷軍人(大工棟梁) | 神田区豊島町5番地      |        |
| 松兼       | 大胡兼吉   | 63 | 酒醬油商       | 深川西六間堀         | 考古蔵書   |
| いせ万      | 大西浅次郎  | 38 | 青物問屋       | 神田市場多町2丁目      | 俳諧     |
| 高橋藤      | 高橋藤之助  | 36 | 提灯業        | 両国村松町12番地      | 常磐津    |
| 田夕梅      | 吉田伝兵衛  | 60 | 豊職         | 浅草区駒形町49番地     | 多趣味    |
| 櫛朝       | 太田吉栄   | 46 | 納札書師       | 日本橋区馬喰町4丁目12番地 |        |
| 彫源       | 小池源次郎  | 49 | 彫師         | 深川区西元町8番地      |        |
| 豊斎       | 竹内栄久   | 64 | 絵師         | 浅草奥山裏          |        |
| 二見       | 二見卯八   | 34 | 足袋卸商       | 神田岩本町6番地       | 将棋、清元  |
| 森慶       | 森慶次郎   | 43 | 駅員         | 中野鍋屋横町         |        |

二見

竹内久一 ろいう 石栄 可山 山三

不二 田子長 いづ赤

とくに、明治末・大正期入会の高橋藤、加山可山、橋田素山などは、「納札」に尽瘁して、とくに素山などは「奇行」の人として知られていた（「<sup>パフォーマンス</sup>奇行」の系譜と現代芸術<sup>アート</sup>への展開は考えてみなければならぬ課題であろう）。素山については、斎藤昌三氏の個人趣味雑誌（『おいら』『いもづる』など）に追悼号があり、参照願いたい。

補助に名を連ねた林若樹・三村竹清・山中笑・澤塵外など、『集古会』の幹事クラスが揃っている。ほぼ同時期の「大供会」のメンバーでもある。集古会古参会員の竹内久一は、周知のように東京美術学校教授として木彫界の重鎮であった。「大正二年十月十八日於高砂俱樂部に贈札及寄贈品納札子供会御札」は、おそらくは関岡扇令氏（『千社札』が「大正二年十月十八日に浅草代地の高砂俱樂部で開催された」と指摘し紹介した納札会であろう。当日の画題は「五月節句武者画」（小村清親画）という。これに該当する「大正二年」では無く「大正四年五月」と明記した小村清親画案の一連の交換札がある（別稿参照）。

なお、小林清親の参加した交換絵札は比較的少ない。林

若樹前述の「絵師……」の批判などとかかわるものがあるか、と思う（河竹登志夫氏稿〈『浅草草紙』所収〉掲載の絵札に、「小林清親」の名を見出す）。

草創期より一貫して「集古会」の中心人物であった林若樹の、納札に関する営みについては、前掲の内田魯庵「千社札のこと」に記述を見る他殆ど知られないが、実はこの大正二、三年頃、書札の絵札交換会に参加していたことが、若樹の日記から明らかとなる。林若樹が集古会の中心人物であるだけに、この第二の資料が、明治末・大正初期頃の集古会と納札界との関わりを如実に示すものである。

「二月廿日 金曜日 曇さむし

終日閑居 昨夜の出品物をうつして夕に至る

夜 廿二日開催のかき札会（納札交換会）の札を画き卅枚を

調製すれば十時を過ぎたり……」

「二月廿四日 日曜日 雨寒

午後雨を冒して十軒店泰文社に行く 書き札会の発會なり

四時近くに至りて漸く開會、札を配るを廿九枚、会するもの納札連、大供会、集古会の一部より出す、趣向面白きものも



あれと中には納札のどこ迄も題名を主とすへき趣旨を知らぬかと思はるゝもあり、又は一枚々々に画を代へたるものありこれら

は画工に多し……」

というのである。

この二点の具体的な資料から浮き彫りになってくるのは、明治末・大正初期頃の集古会と納札界との緊密で切り離し難い「つながり」であり、一体感であった。百鬼夜行図の蒐集と展観に伴う萌芽的な研究の胎動は、絵札交換会の妖怪系の画案創作としての楽しみと場をほぼ同じくしていたのであった。

#### 四、結び——「研究」と「楽しみ」——

現在に継承されてきた「美術史」から回顧する時、百鬼夜行絵巻の研究史は、博物館・美術館の列品から直ちに春村・真頼の著作『増補改訂考古画譜』へと直結することになる。そして最古或いは原本遡及の方向で「研究」は辿られることになるが、そうした「研究」と始発を同じくしつつ（大正期の黒川真道などの「立ち位置」が極めて重要である）、展観・模写、娯楽（風刺滑稽）としての「化物」の添加・削減、いれかえ、更にはもじつたり、見立て

たりして、新たな別本を生み出していく楽しみをも併せ持った領域が、明治末・大正初期の集古会（同趣旨の趣味会）には生き生きと「現存」していた。

前節紹介の大正九年の「近松・吉田安追善」に配布された交換絵札の、一枚の札には「酒樽」の化物が配されるが、先行するおもちゃ絵の「化物尽し」にも認められる図柄である。また、湯本豪一氏『百鬼夜行絵巻』（小学館刊）に紹介された一枚物のおもちゃ絵には、左下匡郭外に「小信画」とあり、関西の絵師長谷川小信の名が認められる。正に、錦絵のほか、団扇絵や、おもちゃ絵といった方面でも活躍し、京阪の趣味家連中の中心に居た、長谷川小信の手に係る（松平進氏『上方浮世絵の世界』（和泉書院刊）。「子供の遊び」と直結した巷間へ「百鬼夜行」が溢れ出ていく経路のひとつが、的確に示される一点である。一方で大正期・昭和前期頃には、納札交換会や宝船の交換会など、多くの「木版多色刷（五回刷など）」の世界がひらけ、海外向けの「浮世絵」複製・土産物を始めとして国内外の受容にこたえるべく絵師・摺師たちの活躍の場が存在していた。集古会に属した豊齋・彫源などの生活の場とその周辺の日々の「ことがら」であった。

集古会の終焉が、昭和十九年であったことと無縁ではないことがらでもある。

なお、本稿は、平成二十年度科学研究費（萌芽的研究、課題番号…20652018）による研究である。

\* \* \*

「中世文学史の一隅」と題した口頭発表（二〇〇八年度伝承文学大会（8月31日、於キャンパスプラザ京都）に、四条家出自で「鎌倉の政僧」との呼称もある隆弁の『吾妻鏡』に顕彰された）履歴と、謀反の廉で捕縛された「了行」の（『吾妻鏡』に隠れた）履歴とを「重ねて」示した。

彼此の対比には、更に建長三年（一二五二）の閑院内裏造営における問題を重ねて考えるべきであろう（四条隆親の功績〈吾妻鏡〉）。科研報告書（研究代表者 野口実氏『閑院内裏の政治史的研究』（2008・3刊））を参照願いたい。この頃の隆弁の社寺参詣記事を拾うと、嘉禎四年（一二三八）二所参詣導師、宝治二年（一二四八）四月諏方神社、建長元年（一二四九）十一月、永福寺供養導師、建長三年（一二五二）二月、三嶋神社参詣、同年四月、武蔵鷲宮大明神、建長六年（一二五四）三月、執権時頼大般若経供養（於鶴岡宮寺）導師、建長八年（一二五六）秋、鹿嶋社大蔵経供養導師、という慌しさである。「諏方」、「三嶋」、「武蔵鷲宮」、「鶴岡社」、「鹿嶋社」と列記するならば、鹿嶋社大蔵経供養導師の一件も隆弁による「鎌倉」内外の寺

社勢力への関わりとして捉えることも可能であろう（笠間時朝の常陸から上野にかけての広い地域での「詠歌」、「造仏事業」という常陸の宇都宮氏の「活動」との交点でもあった）。その際、了行（敢えて言えば慶政一門、但し「慶政」は別格の重みがあり、「了行」と同列に置くことはできない）関与の大蔵経補刻葉を避けた可能性は充分考えられる（大東急記念文庫蔵鹿嶋社奉納一切経のうち、『金剛三昧本性清浄不壊不滅経』『師子月仏本生経』は、東禅寺版に基づく補写〈小山正文氏指摘〉であるが、慶政一派の補刻葉のあるものではない）。時朝が「前長門守」であったことも重要であろう。

又、道家が文暦二年仲春に、阿弥陀経一卷を自写し、以て宋朝に送り、模刻し十万巻を雕印流布（施印）させようとしたことは、『願文集』巻四所収「四天王寺阿弥陀経供養願文」にも触れており紛れもない「ことごと」であった（森克己氏『森克己著作選集』第四卷「日宋文化交流の諸問題」〈昭和25年6月刊〉、坂口太郎氏の御教示）。明らかに道家には、唐土の「施印」という作善が意識されていたことになる。書写経を四天王寺に奉納するという「本朝」における書写・奉納の善功が、一方で顕著な形で示されたものでもある（二〇〇八年五月末のシンポジウムでの発表「十二世紀後末期の日本舶載大蔵経について」〈於天台山賓

館〉を改題して同内容を収めた勉誠社刊行予定『海を渡る  
天台文化』所収牧野稿参照。なお、川瀬一馬氏紹介の聖教  
断簡三葉（既に指摘）が寺門派の真言書『宝秘記』の部分  
であること、同記が金剛輪寺や曼殊院に関わる典籍である  
ことについては、詳細を本誌次号に掲載予定）

\* \* \*

最後に、貴重な典籍の閲覧調査・撮影の御許可を賜りま  
した川崎市民ミュージアムに対しまして厚く御礼を申し上  
げます。

（まきの かずお・実践女子大学教授）